

シラバス

グローバルパースペクティブ2050（2014年秋用, Ver. 02）

2014年10月6日

問題意識

2050年に向けて世界はどうなるのでしょうか？新興国ロシアや中国などの滑稽なくらい前近代的な「国家主義」の台頭は無視できない動きかも知れず、そう考えると「現代は第1次大戦前夜と同じ。“国家の暴走”は止められない」という悲観論が出てきます

一方で西洋文明を起源にこれまで世界を秩序付けてきた「民主主義」「資本主義」の二つのOSの行方も気になります。民主主義のフィクションがどこまで維持され、資本主義の暴走はどこに行き着くのでしょうか。あるいはともに自律修復を繰り返して延命進化するのでしょうか。さらに、もしかしたら非西欧諸国の思想や哲学、あるいは利他主義や博愛主義が資本主義や民主主義を変えていくのかもしれませんが。しかし新興国の国家主義が果たしてそれを受け入れるのか疑問です。

あるいはそもそもこれからの歴史は進化しないのかもしれませんが。そもそも歴史は繰り返すどころか一箇所にとどまり、停滞するのが普通の姿なのかもしれません。だとしたら2050年は今と変わらない・・・。

今学期は、こうした重層的な問題意識のもと、4つの角度から2050年の世界秩序を考えます。

第1部 世界観

ここでは「西洋が世界を近代化した」という教科書的常識を疑ってみます。常識の代表格はヘーゲル（第2回）。一見、分厚く難しそうな本ですが、読むと意外に簡単です。今にしてみると明らかな間違いや偏見も多数ありますが近代西洋の世界観を代表する本ですからがんばって読みましょう。松岡さんは日本史に精通した立場からそれに挑戦します（特に若い人向けに正しい歴史を学んでほしいという情熱を感じさせます）。なお杉山さんは京大のユニークな中洋史の先生。定住しないアジアの平原のノマドこそが東西の“両端”を感化したという独特の世界観です。

●第1回 9月22日「誰も知らない世界と日本のまちがい——自由と国家と資本主義」松岡正剛

●第2回 9月29日 「歴史哲学講義」ヘーゲル（岩波文庫）（余裕のない人は第2部、3部は割愛しても良い）

●第3回（その1）10月20日前半「遊牧民から見た世界史」杉山正明（日経ビジネス人文庫）

2. 民主主義

まず、日本の現実を鋭く批評する薬師院先生の本を読みます。つぎに歴史。まず英国では現実の政治の必要性から王を貴族が統御する思想として実務的に発達。一方、フランスでは理念先行で思想が先行。今学期は両方の代表格としてホブズとルソーを読み、その

後の変遷を考えます。

- 第3回(その2) 10月20日後半 「民主主義という錯覚」 薬師院仁志
- 第4回 10月27日 「リヴァイアサン」 ホブズ 中公クラシックス (I, II)
- 第5回 11月3日 同上
- 第6回 11月10日 「社会契約論」 ルソー 光文社文庫

3. 日本の歴史、近代化と天皇制

天皇はローマ教皇に似た祭祀の長であり、政治権力と絶妙な距離を保ちながら統治機構の要として日本に根付いてきました。“万世一系”という挑戦不可能な正統性が日本における易姓革命を抑止し、明治以降は、科挙制度と天皇制が融合して暴走する軍部とパターンナリストティックな天皇の官吏(いわゆる官僚主導)を作り出しました。

かくして日本における民主主義を考える上で天皇の存在は欠かせません。また、象徴天皇制は憲法では消極的位置づけですが、今後、新興国が国家主義的になればなるほど位置づけが変わるでしょう(9条の意味が集団的自衛権で変わったように)。2050年の世界秩序に向けて日本の天皇制をどう位置づけるべきかを考えます(私は天皇制廃止論者ではありませんが「廃止論も含めて」とシラバスに書く難しさなども含めて議論)。

- 第8回 11月17日 「天皇論」 坂本多加雄 (文春学藝ライブラリー)
- 第9回 12月1日 「近代天皇像の形成」 安丸良夫 (岩波現代文庫)

4. 資本主義

資本主義の暴走とその危険性はマルクスが指摘し、レーニンが敷衍し、シュンペーターが諦めた・・・かのように見えますが、オーストリアのポラニーが市場と国家と資本主義の関係をおそらく最も精緻に整理しています。もしもポラニーが生きていたら2050年をどう予測するか。この問いを念頭に大著に挑みます(全部読むと厳しいので飛ばすべき箇所は別途相談します)。

- 第10回 12月8日 「大転換」 ポラニー
- 第11回 12月15日 同上

5. グルワ

今期のグルワは上記著作の周辺を掘り下げる調査を中心に3班を設計します。

第12回 1月14日グルワ発表会

第13回 1月19日グルワ発表会

(特別セッション) 12月7日行政経営フォーラム@三田キャンパスにて発表(民主主義論)